

原稿執筆用テンプレート (非公式 L^AT_EX 用テンプレート)

English Title

(English Subtitle)

○学 大阪 太郎^{*1}, 大阪 次郎^{*2}, 大阪 三郎^{*3},
Taro OSAKA^{*1}, Ziro OSAKA^{*2}, Saburo OSAKA^{*3},

^{*1} 吹田大学 Suita University

^{*2} 箕面大学 Minoh University

^{*3} 株式会社 Corporation

Before starting your manuscript, please review both this sample file and the official manuscript guidelines published by the Japan Society of Mechanical Engineers. The original sample was created in MS-Word; this version has been adapted for T_EX users by Hiroki Ono. Questions may be directed to: ono(at)md.mech.eng.osaka-u.ac.jp (Please change (at) to @).

Key Words: Keyword1, Keyword2, Keyword3, Keyword4,...(Show five to ten keywords.)

1. 緒 言

本テンプレートは、日本機械学会が定める論文執筆要綱に沿った体裁で投稿できるよう、フォントサイズ等の書式をスタイルファイルとしてあらかじめ組み込んだものである。これにより、1行あたりの文字数や1ページあたりの行数といった規定に沿った原稿を容易に作成できる。

本文の分量は1ページにつき50字×46行の1段組を基本とし、合計およそ2300字となるよう調整する。文の区切りには全角の読点「、」と句点「。」を使用し、括弧類も全角文字で統一する。

本文のフォントには明朝体・Serif系書体（Century, Times New Roman など）を用い、章・節・項の見出しにはゴシック体を使用する。文字サイズやフォントの詳細は、執筆要綱の第3・10節を確認されたい。

毎年要綱は微妙に体裁が変化する可能性があります。必ず日本機械学会が公式に配布している docx テンプレート、および日本機械学会の論文執筆要綱を熟読して作成してください。

2. このテンプレートファイルの使い方

本テンプレートでは、表題・副題・著者名・本文といった各要素に、学会指定のフォントサイズ等の書式があらかじめ設定されている。この設定を変更せずに執筆を進めれば、規定の文字数・行数を満たした原稿に仕上げる事ができる。

3. 原稿執筆の手引き

3・1 原稿の規定ページ数について

2025年度年次大会に提出する原稿は、2~3ページ程度を目安とし、5ページを上限とする。なお、原稿中にページ番号を記載する必要はない（年によって微妙に変わる可能性があるため、必ず確認してください）。

3・2 原稿の作成に際して

原稿の先頭部分には、日本語の表題・副題・著者名に加え、英語表記の表題・副題、著者名のローマ字表記、および所属機関のローマ字表記を記載する。

3・3 表題及び副題の付け方

表題は、研究内容が一目で伝わるよう、簡潔かつ的確な表現とすることが望ましい。副題を付ける場合もあるが、「第1報」「第2報」のような連番的な表現の使用はなるべく控える。

3・4 英文抄録の書き方

英文抄録は150~250語程度とし、改行を挟まず一続きの文章として記述する。抄録だけを独立して読んでも、研究の対象・方法（装置）・結果が具体的に把握できるように書く。本文中の図表や文献番号は、抄録内では引用しない。数式を示す必要がある場合は、式番号を付けずに式そのものを記載する。

3・5 キーワードの付け方

キーワードは、原稿の内容を端的に示す重要な用語である。これにより、原稿の分類や検索が効率化される。本文を書き終えたあとに選定するのが望ましい。

- (1) 個数の目安は5~10語とする。
- (2) 英文抄録の直後に英語で列挙する。一般的な複合語として認識されるものを除き、ハイフンは用いず、前置詞や冠詞も含めない。

3・6 見出し（章、節、項）の付け方及び書き方

本文は内容ごとに区切り、適切な見出しを付す。章の見出しは2行分のスペースを取り、行の中央に配置する。節・項の見出しは行頭を1文字分あけて記載し、改行してから本文を続ける。節の直後に項が続く場合も改行を入れる。見出しの書体はゴシック体とする。

3・7 量記号・単位記号の書き方

量を表す記号はイタリック体で、単位を表す記号はローマン体で記載する。無次元数についてもイタリック体を用いる。

3・8 用いる単位について

単位表記にはSI単位を用いる。数学記号、単位記号、量記号は、いずれも半角英数字で記載する。SI単位の詳細については、学会発行の「機械工学 SI マニュアル」や「JISZ8203 国際単位系 (SI) 及びその使い方」を参考にされたい。

3・9 用いる記号

数学記号はJISZ8201に、量記号はJISZ8202にそれぞれ準拠する。数字の書き方は、表2の例を参照する。年を表す際は「本年」「昨年」といった相対的な表現を避け、2007年のように西暦で明示する。

4. 図及び写真・表の作成に関して

- (1) 本文中の図表番号は「図1」「表1」のように日本語表記とする。写真も図として扱い、カラーでの掲載が可能である。
- (2) 図の番号・キャプションは図の下側に、表の番号・キャプションは表の上側に配置する。
- (3) 本文と図表の間には1行以上の余白を設け、視認性を確保する。
- (4) 図表内のキャプションや説明はすべて英語で記載する（先頭の文字は大文字とする）。書体はSerif系、サイズは9.5ポイントとする。
- (5) 図表の横に生じた余白へ本文を回り込ませてはならない。
- (6) 図表がページの余白部分にはみ出さないようにする。

5. 数式の書き方

式番号は、式と同一行の右端に括弧書きで付す。本文中で式に言及する場合は、式 (1) のように表記する。式の書き出しには 2 文字分のインデントを設ける。また、本来必要な行数はきちんと使い切って記述する。3 行分の式を無理に 2 行へ詰めたり、逆に 2 行分の式を 1 行に収めたりしてはならない。本文と式、あるいは式同士の間には 1 行以上の空白を入れ、見やすさを確保する。

数式エディタで使用するフォントサイズは、原則として本文に合わせるが、添字等が小さくなり判読しづらい場合は適宜拡大してよい。

$$d \left\{ \sum \frac{1}{2} m k \left[\left(\frac{dx_i}{dt} \right)^2 + \left(\frac{dy_i}{dt} \right)^2 + \left(\frac{dz_i}{dt} \right)^2 \right] \right\} = \sum (X_i dx_i + Y_i dy_i + Z_i dz_i) \quad (1)$$

$$\bar{C}(t) = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^N C_i(t) \quad (2)$$

$$C_{th} = \frac{\sum_{i=1}^N C(t)}{\sqrt{\sum_{i=0}^N (l_0 - l_i)}} = \frac{b}{a} C_0 \quad (3)$$

$$W_{th} = Q_1 \frac{\Delta T_0}{T_0 + \Delta T_0} = Q_2 \frac{2\Delta T_0}{T_0 + 2\Delta T_0} = Q_2 \frac{2\Delta T_0}{T_0 + 2\Delta T_0} = GL \frac{\Delta T_0}{T_0} \frac{T_0 + \Delta T_0}{T_0} \quad (4)$$

6. 引用文献の書き方

文献を引用する箇所には、肩付きの小括弧で通し番号を付す。例えば、新宿・渋谷⁽¹⁾⁽²⁾のように記載する。引用した文献は、本文の末尾に番号順で一括して掲載する。日本語文献は日本語表記のまま、英語文献は英語表記のまま記載する。

7. 結 言

本テンプレートのスタイルを用いれば、各項目の書式が自動的に適用されるため、執筆の手間を軽減できる。